俳諧職業盡　乾

へ 5
1632
1

門 へ 利 5
號 1.639
巻 1

珍蔵

明治四拾年 購求

梅の花そ。いろかをもあつめ。
なにはの春しるとなれはきさらきに。
人としてなつかしき香ならく。
こころ葉あらはみやこなかやしハ
色なき後。ここに伊勢は。
馬のはな穴ぞしるものよしあ。
毎年みよみ。梅はものなけせて
とるも。あまにおもふあしとや

いろのす。かをりは我をもてかふ。みせも
それあやはめつことの葉をかなへの左京
あまのは。手わらる梅さくよのまへ
ちる人。人みなし花しはの香のにを
きとをたりし芳信をわすらなにや。
けらははみものくれ。季吟るよみち。
うしなうさに。月淀きたれはあまき
我ふも。我都のきくにみれ。盛なり

ほられ。いにしへよりつたはれる
しく。まことの道は。ほかならぬ
此年ごろ人のおもひの中に。
わか友雲水軒のあるじなるぞ。
なさけはる人ありて春のまうけ
にみるまへにみちをさとるいそ
るものはけるすにしるす。月をみち
あまた見るとき。おもひ高く

神代にはじまりて。ほかにはなく
仙給ひしよりはるかにつたはし。
ちゝにおもひそめ。今まで伝と
なりしを近きか。いまみる句数
うちて。わか方なるに。あらゆること
まてらはるゝもしるしとて。こゝに
古の道をまねびて。かの
か風のまねしらぬとよむ。

まれ
しらぬまでみゆ。よろこぶなり。
そのきさしの候とかし。前かたに
はらの前代二季まつらんしらず。
おもしちぎりもまた深くいろいれ
きるかきれんし。うらやましきに
あらそふ人ぞとしのみうたりも。
つゝはのかみちゑまへんとのまかれん。
きしらさまにて。上臈みさみ

あふよきうえみれ。おころこゝみてきそし
くも又中政みち前ゝ色のどれ生まれ
はけの絶つくしれも。於候極らふ
ほまかれに。まれていうちみ泳ろかや
られそうすうらほとも明れまし後に
ふくふみ
大御代のみきん。天乃保つるまゝ
かしのすとせあまか。ことせの春。

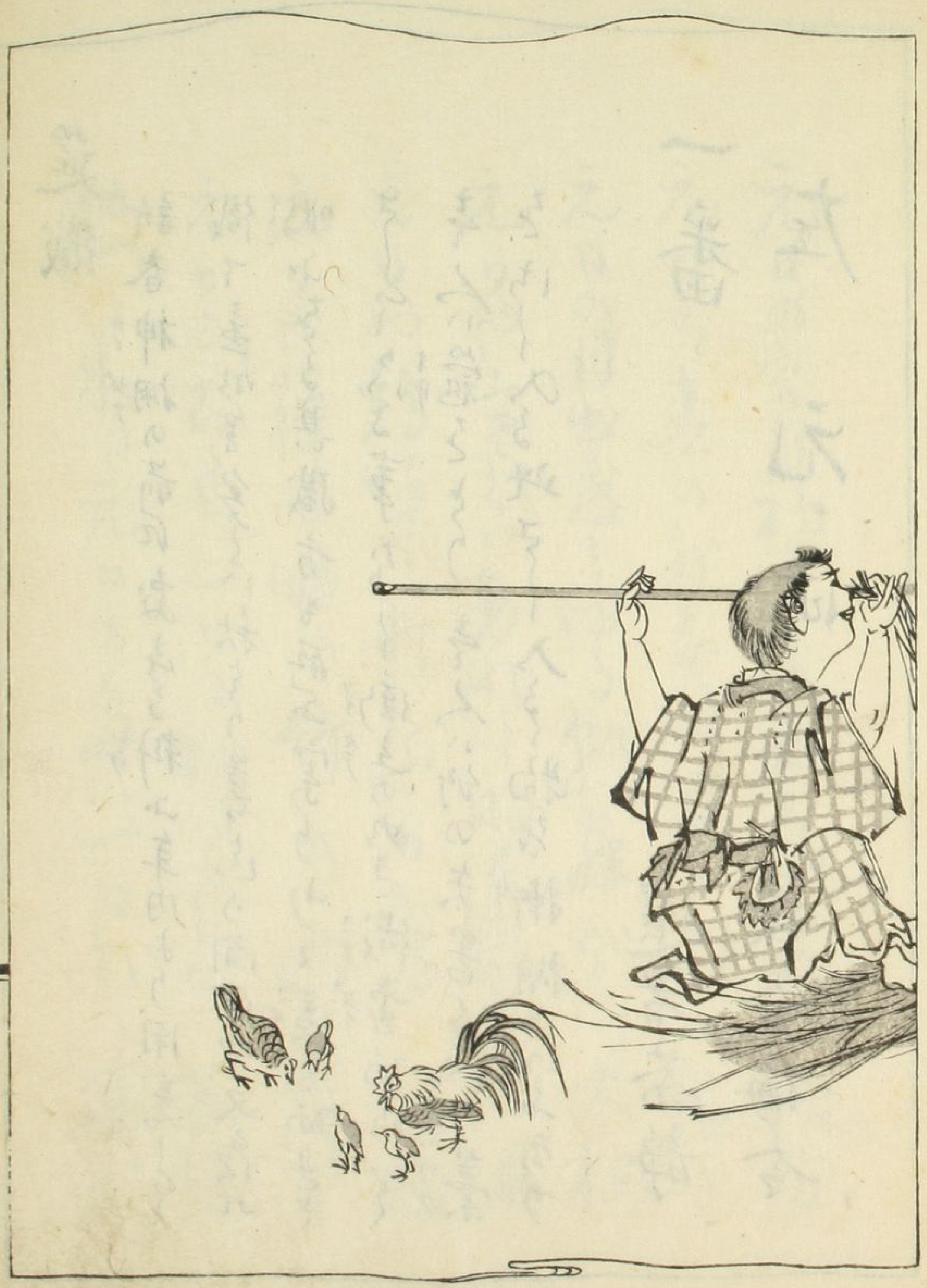
早稲田大學圖書

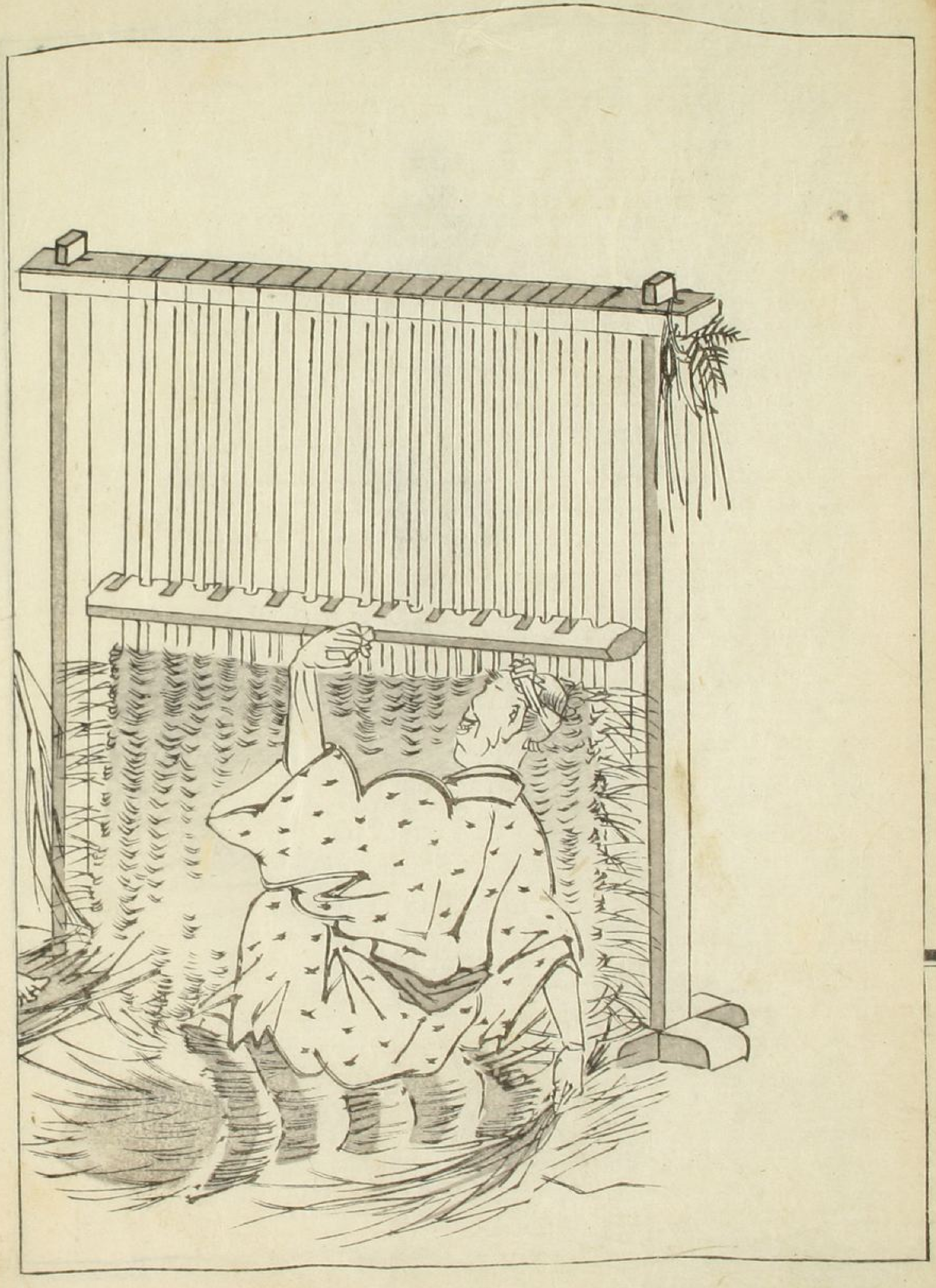
春之部

もろはしきものは。むさしのの
廣く安り弘めて世の人。此ごと
しへ千おもむれされあそ我すこと
をあふ。いのちされ

桃室のあるし

梅香郎





筵織

新春神棚の前に敷なる料に年内より用意して織て置ものなり多くハ秋より暮迄の間雨中又夜分暇ある其織方も所々違ひあれどさしてかはる事なし衝立のやうなる織台ありて其人ハ筬をとり其人ハ竹の矢筈を以て藁をはさミ入る此さし入る物を撕棚といふなり

一番　左　元日

選者　茶静
校合　梅令

元日の言ひ初よき天気かな　諸方
元日もまた春のおなる且なれ　花柳
元日の月出る夜ぞ寝る熊かな　大梅
元日やうきふハあれと晴たれし　一具
元日や鶴の声にて打たるる　月底
元日や篠も曠の竹の雨　花川子
元日の志ハ二日に残りけり　蓍作
ゆつくりと元日らしき一日かな　鳳郎

菅笠もめてたき元日の日さしかな　葛古

元日そ我にゝきめく立ふり理　茶静

右

霞

日の出乃まゝ一ッ消て初霞　鳳朗

さり以ハ実になるめてたつ霞　渉鵠

鶴の首家ゟちまきりと霞かな　一瓢

取留ぬ堤ゟ住るや霞ゟ家え　素芯

神主ハ弓子ね遊ふらきさかな　由誓

一茶子とらんて

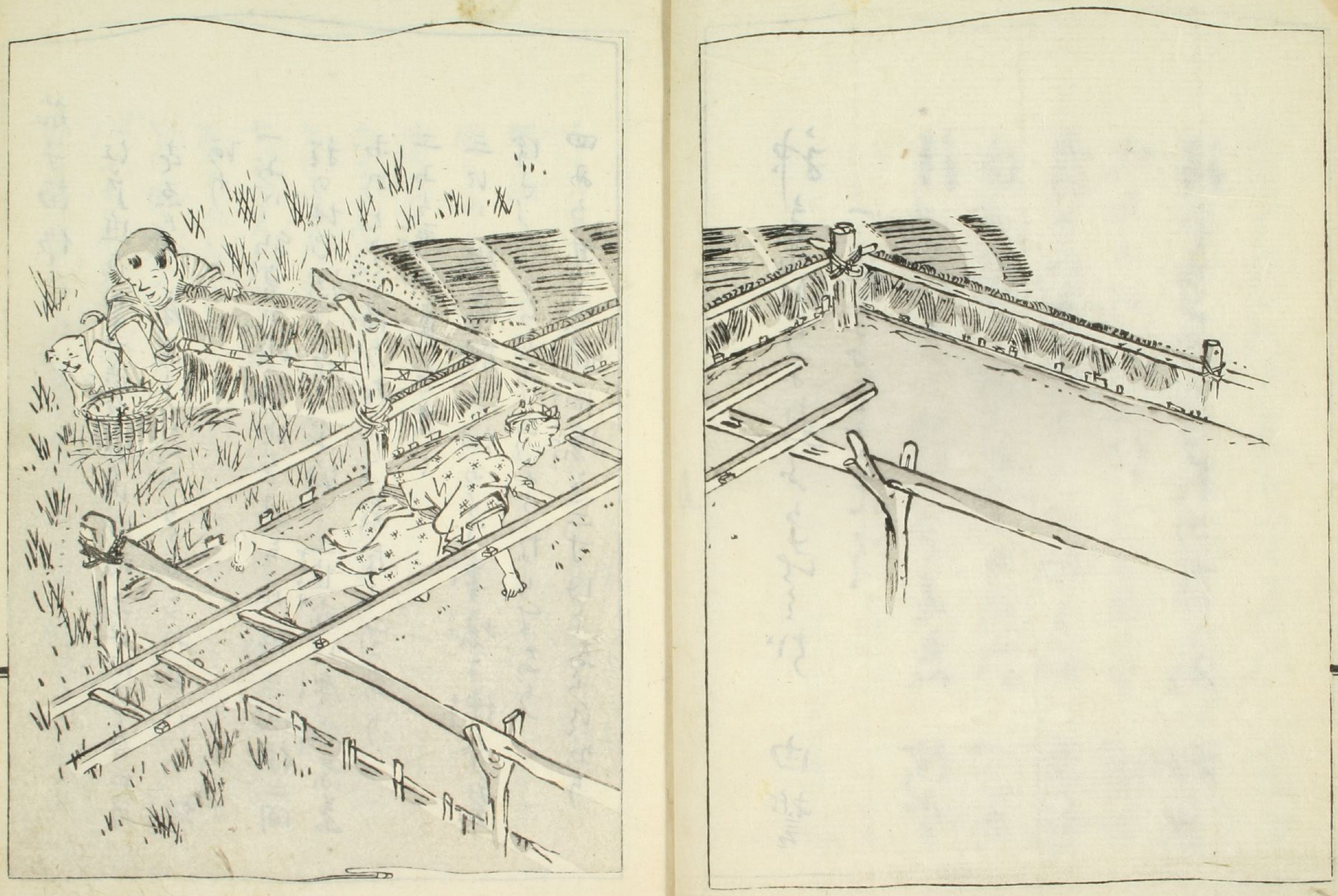
隣の顔型ハ降へき春霞　檽堂

隅さ餅を搗て雲あらかな　一茶

霞日に打住まさる梅かれ　茶静

吹ちらし風に絶えハ霞哉　風外

隣の青み出る艸の霞かな　梅巣



茄子苗作

江戸近在目黒澁谷（シブヤ）堀の内砂村なとにてハ春正月を過る頃より床をしつらへ而してこれに八ッの培（ツチカヒ）あり

一ッにハ初夏の頃能地を見立凡縦（タテ）三間横（ヨコ）二間程の地を深さ壱尺余堀て土苴（コヤシグサ）或ハ塵芥（チリアクタ）落葉なとの類を腐（クサ）りたるをおなしすなり

二ッにハ廐沃（ニヤゴ）糞（エ）をおく

三ッにハ廐膏（ゴ）腴（エ）を細かにして糞壌（シモゴエ）に煉（ネリ）合勢ぼろ〳〵とならぬやうにしてよくならすなり

四ッにハ其上へ篩（フルヒ）細壌（フルヒツチ）を二寸ほとあつくかけなり

五ッにハ其上へ碁（ゴ）盤の目のごとく篠（シノ）竹にて縦（タテ）横（ヨコ）に埒（スヂ）を付其すぢの四ッ目の所へ五六粒づゝの圓のごとく階子（ハシゴ）を横へ渡し結び手を差伸て蒔なり

六ッにハ其上へ至て細密（コマカ）なる灰をかくるに此うけかんじん至て練（ヒニ）ものなりとぞ

七ッにハ其上へ藁灰と云物をいかにも細末にしみて厚さ五六分くらゐ坩（タニ）りに蒔ひろぐるなりば終ニ馬（バ）糞（フン）の事をいへり

八ッにてハ其上へ藁（ワラ）を解（トキ）て一めんにかけ又かくて其床を覆（オホ）ひ四方を構（カベ）にする也厳（ゲン）

重なり置ハ其床の上の苫覆を取前後に
莚屏風の東西をひらき南を取拂ひ日ハ十分に
請け夜ハ四方立塞ぎ上に苫を覆ひ風霜を
除るなり
右床に苗五千種内三千ハ茄子弐千余ハ隠元豇唐
からし唐がらしの類ともに何れても能く苗の芽出し
萌そめたる頃葉を不残取捨むて見分になら
ぬハ葉に葉草又馬糞茸の生る事夥し是を
日々取捨る肝要とせり見分五六本の内痩たるを
一本つゝ毎日抜とりつひに一本立素性のよきを残し
種を蒔て春の彼岸より十二三日目見分に成ると

云五十日目に六七葉くらゐ生立つ時中に芯を持
多るもあり是を畑へ移に其花を落さぬやうに
植るなり肝要なり八十日め百日め頃漸々に初茄子
生るなり

因に云米麦ともに人手にかゝる事古人ハ七十二度といへり前にも
四五十度を経ざれハ食物に不成農人の丹精を思ひ知るべし

二篇
花営
営の舟に大つき閑ま書
茶静

鶯も拝まれてゐる軒の梅　素芯

鳴のりて鶯廿日よまりけり　士朗

聞ぬふりして鶯を啼せけり程　柳也

守らしは不鳴れて吹ぬ忘れ花　奉泉

鶯の癖覚えけり藪ほとし　素芯

鶯も同しへちらほら二度三度　卓池

鶯の啼さしなれも窓明り　ゑつらめ

黄鶯の飛て開眼さ小藪か　眉山

鶯の夜明さへて舌も一つき　逸淵

乗物の鶯鳴や松かきき　烏頂

鶯や留主の軒端を飛さ啼　止延

黄鳥も鳴さえ立しをとまる　風朗

右

蛙

まさ顔い古茶の下行蛙かな　蒼虬

足擢る明る雪も聞ゆる初蛙　千幹

鳴かれて眼をさまされしや初蛙　素芯

啼ならしてきくはなやかな蛙　淡叟

鳴きめて吹かぬ夜もある蛙かな　其笑

引窓にすゝみこのみ蛙かな　宇橋

蛙子の生れ嗅ける家陰かな　蔦三

蔦きをえつゝ白眼蛙かな　一茶

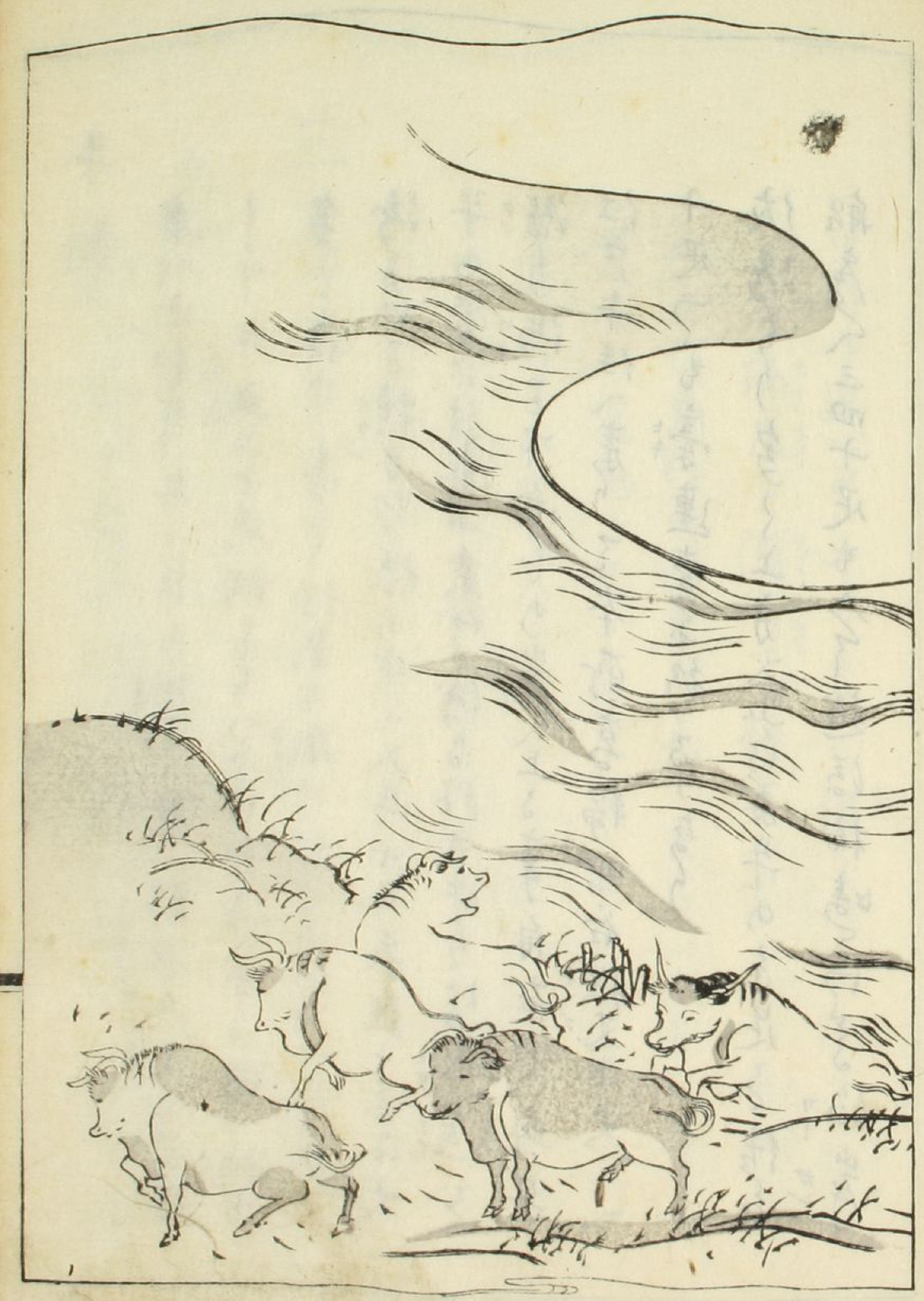
目夜から地声かきする蛙かな　風郎

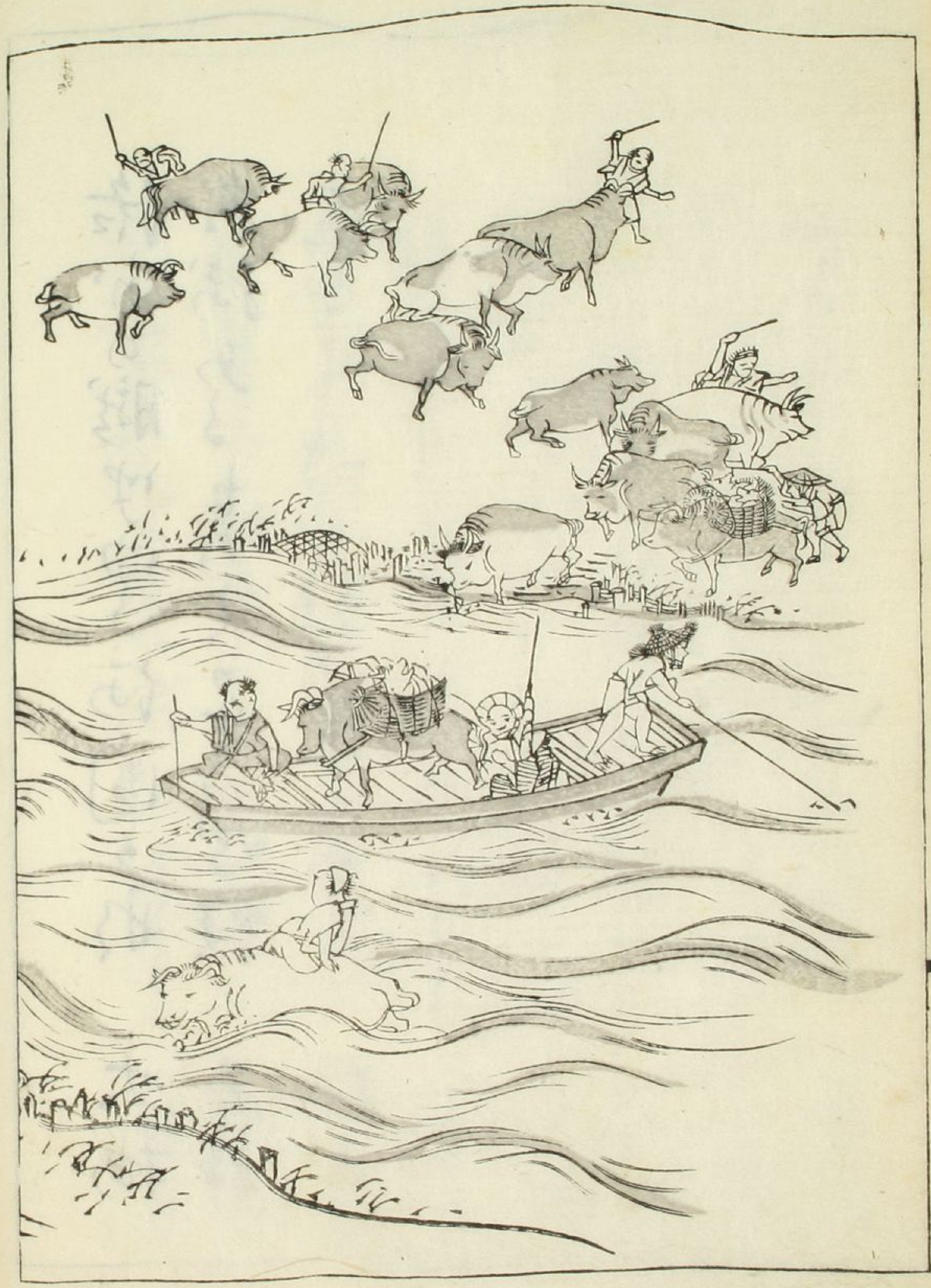
鳴さして志ん夜の浅河図かな　蝶六

洛和の勝呼声る河図かな　大梅

名残ある女の尺見鳴蛙　茶静

這寄らは鳴お蛙の声もなし　梅今





牛飼

奥州南部より年〻牛を鬻ぐ其一群を牛商四五人位して牛五六十疋綱をもつけず付添来る驛路を多く夜中に来りて往来の礙げせざる様なりまた川を渡るに子犢牛粉俵の中へ入牛士の衣類ともに大牛の背に付舟に乗て渡る外の牛を皆水底を潜り渉りて向ひの岸へ上る事自在なり此牛江戸千住へ来りて本所高輪四ッ谷拱文なと夫〻へ十疋つゝも牽連れ売に行事なり

佐渡よりも多く上方へ出る中牛の手足を結ひ船底へ三四十疋も入て越後柏崎へ回る海岸一里程も近づけは牛の手足の縄をほどき海中へ投込み牛ども海底を潜渉て柏崎へ上るなり售牛をは船を仕舞て柏崎へ着て夫より大牛の背に三四十疋乃喰物と己が着類とも負せて近江を行に道でなき山中をたどりして連行之是も夜を行ごとく往来の妨に成らぬ為なり

三葉庵梅

散ひかぬ香も暖の梅の花　梅合

今朝ふてくらさかれけり梅の花　小園
咲もせぬ梅を四ッ谷の便かな　一蕙
人傳に咲ても梅の匂ひかな　應ゞめ
梅遠き言も付ける新藪の宗　葛三
いぬうに咲てかられて来の花　總ゞめ
待るゝ梅ハ咲て内外もぬさりけり　すゞめ
梅香も藪の中より掃ち理　士朗
島つふり室さもなるに梅の花　亭々

梅折や汐四方まゐる大聲に　一茶
うち咲や面白げに縄を宗ふ　葛三
旅人ハ生れて生なり梅の花　太節
先壹の跡まかりし古枝き梅　青壺
流れ來る蓉のうめの継ぎれけり　茶静
いつまでも思ひもやると梅の花　黒駱
一本つゝ見て来る梅を一眼かな　壺高
山里や垣のたてらし見よめの花　素芯

咲さしてぬる夜過しぬ風のうめ　成美

不足なく粥に入もの梅の花　乙二

往来に焚火の声や雪に梅　茶静

うゑらの書や雪ふ粥半の斜け　道彦

右

柳

手に取れる正月の柳哉　守洋

春らぬ日をとりて見る柳哉　八朶

大名人のあらそへる柳かれ　成美

立どまる所にそよる柳の雛　茶静

近海より立上る柳哉　蒼虬

上ぼる春の雨をかぶりけり　素芯

柳から家も舟も揺れけり　露泉

めつきり柳に取る月もしら　葎石

世理の花は春の持地に梅る　喜緑子

何ともの柳の春も一志また　八朶

青柳や岬を見ゆる一日路　卓池

稲村ヶ崎にて

牛石まで霞や柳むらの貝　守穂

影を樹に寐かし馬の春哉　梅令

掠るものを目までとる柳哉　元風

振ながらさし傘戻り夕柳　道彦

風の出て見失ひけり遠柳　秀外

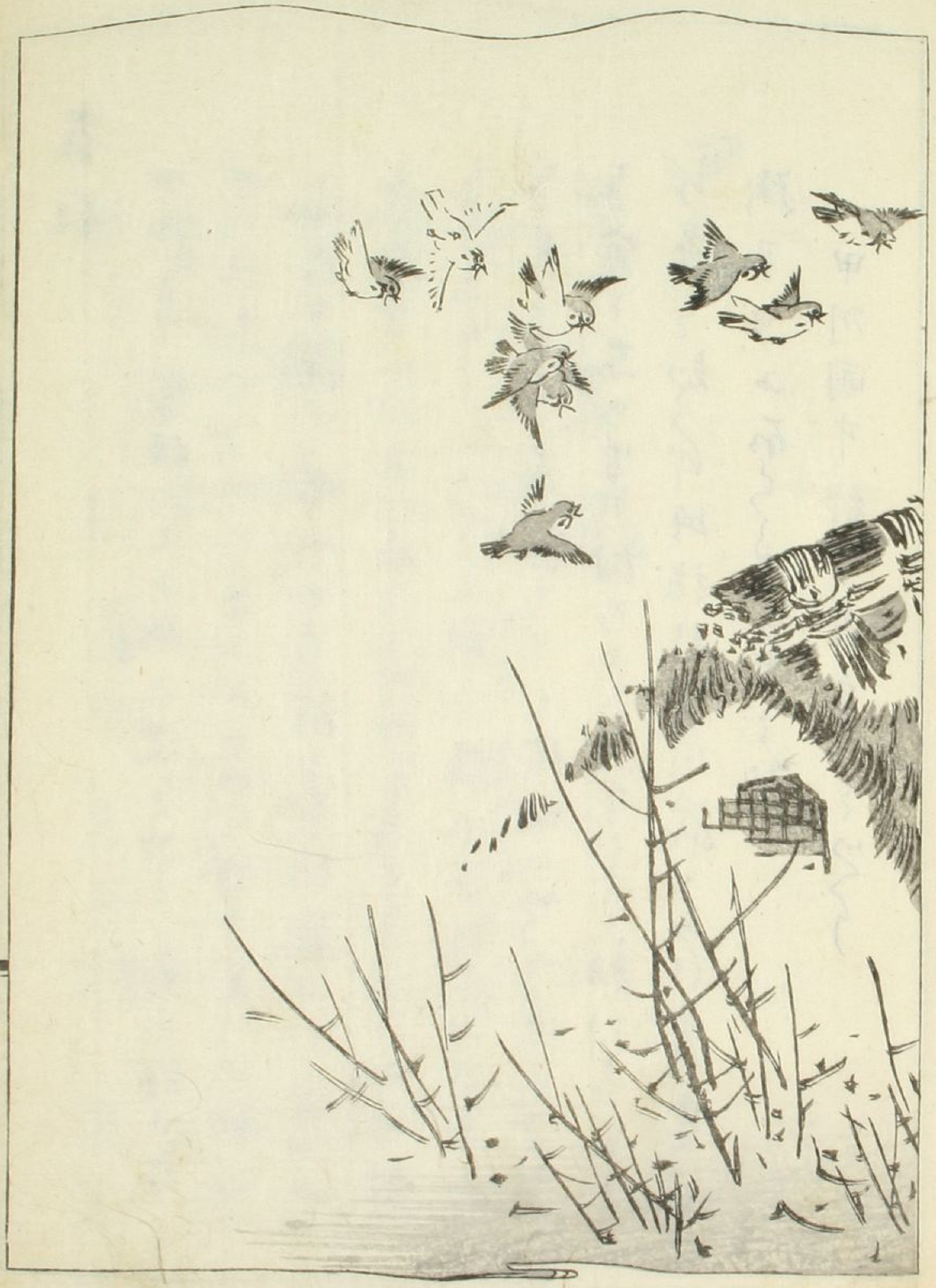
吹返し綿て捕る女房哉　淅路

吹止て家に入る柳かな　鳳山

麻まで謡や昔の人の柳かげ　茶静

柳まで船に覚えぬ生れやみ　鴎里

降りして柳まで闇き春哉　湖山



雀取

甲州にて家根の上に鼬(イタチ)の皮を出して動(ウゴ)く様になせば近邊(ヘン)七八ヶ村の雀四五百羽も群り来り此鼬に三四尺も隔(ヘダテ)て囀(サヘヅリ)呼(サケブ)かゝり程なく此鼬を引隠すに其まゝぬけせしやうにてきよろりとして惘然(アキレた)躰なりしかども何かして又鼬を隣の家根へ出す甚だけを見るより雀は恐れなく傍個(ウツケ)になりて追来る所を家と家の間の樹の上へ竿にて黐(モチ)引かけおくが雀是を知らで此枯枝葉へ来るが上に夥(オホ)く集りて残りなく取らるゝことなり

甲州國中都て雀多しといへり

四季

花　春風

春風に留不尽き吉野の風　一瓢

吹かへる鳴の静なる春の風　松荘

鶯子児の春風にまじる探韻かな　宇橋

暮るる日も出りて秋春の風　佗逸

戸を引て擲けり春の風　作者不知

たるみ風吹そて見れハ春ぞなし　抱儀
春雨や知る人にあふ鳩の中　蕉雨
春風や籠ぬけの鳥鋪子に居る　扶園
日の暮るゝ所まで宿や春の風　茶静

右

春雨

一驛へ湖明りや春の雨　梅令
春雨に降にまかりぬ茶の畑　成美

枯草の春雨たまる垣根かな　大梅
春のふる降へきもなき春の雨　若人
折ぬれぬ物まてなる春の雨　道彦
降出して始終明るし春の雨　桐堂
春の雨こゝの川を晴るゝき　多遷
春雨や鳥の足に泡のつく　素隣
浙江かし汐のみなぎる春の雨　蒼虬

馬刀貝取

何国の浜にても汐の干潟の真砂地をすこし掻掃へば穴あり此穴へ塩をつまみ込バ馬刀貝を出す露を透すかし掴み取なり国所によりてハ箸にてぬくもあり串を穴へ差込て其馬刀をほらぬもあり又其中らの穴の口をも見出し時取ることなふ事何れハ砂中更に行方を不知と知り塩を入るれハ頭を出すハ潮のさし来る心にて浮み出るなるべし伊勢桑名四日市等美味にて貝も大きし豊前小倉名物大くして長五寸斗二本つゝ高ふ

他国にて斗にたらて高ふに似り
汝きは五尺のかわきたるが貴て一切
衆生の煩悩を安まんまで
此をあれはなき
馬刀取すみなりて
居るつきに佐新供

青壷

五
花鳥
出代

出代の立ほふかるなもまされ　千寓

出代に揃えて銭乱ほとし　茶静

出代や赤荷を妻見て通る　紅阿

出かはりの捨てゆるや袖の雑　こゝめ

出かはりの肌に酢の匂ふる小器か　物二

出代の手拭竿か忘れて見置　忍んめ

出代てうき人達て来にあり　卓池

出代に高続ゝ申る新なるし　茶静

右　薮入

薮入の近寄まゝ余所の秋　諸方

薮入や神様釈迦か恵母常　茶静

薮入に言はれて拝む持仏かな　蒼虬

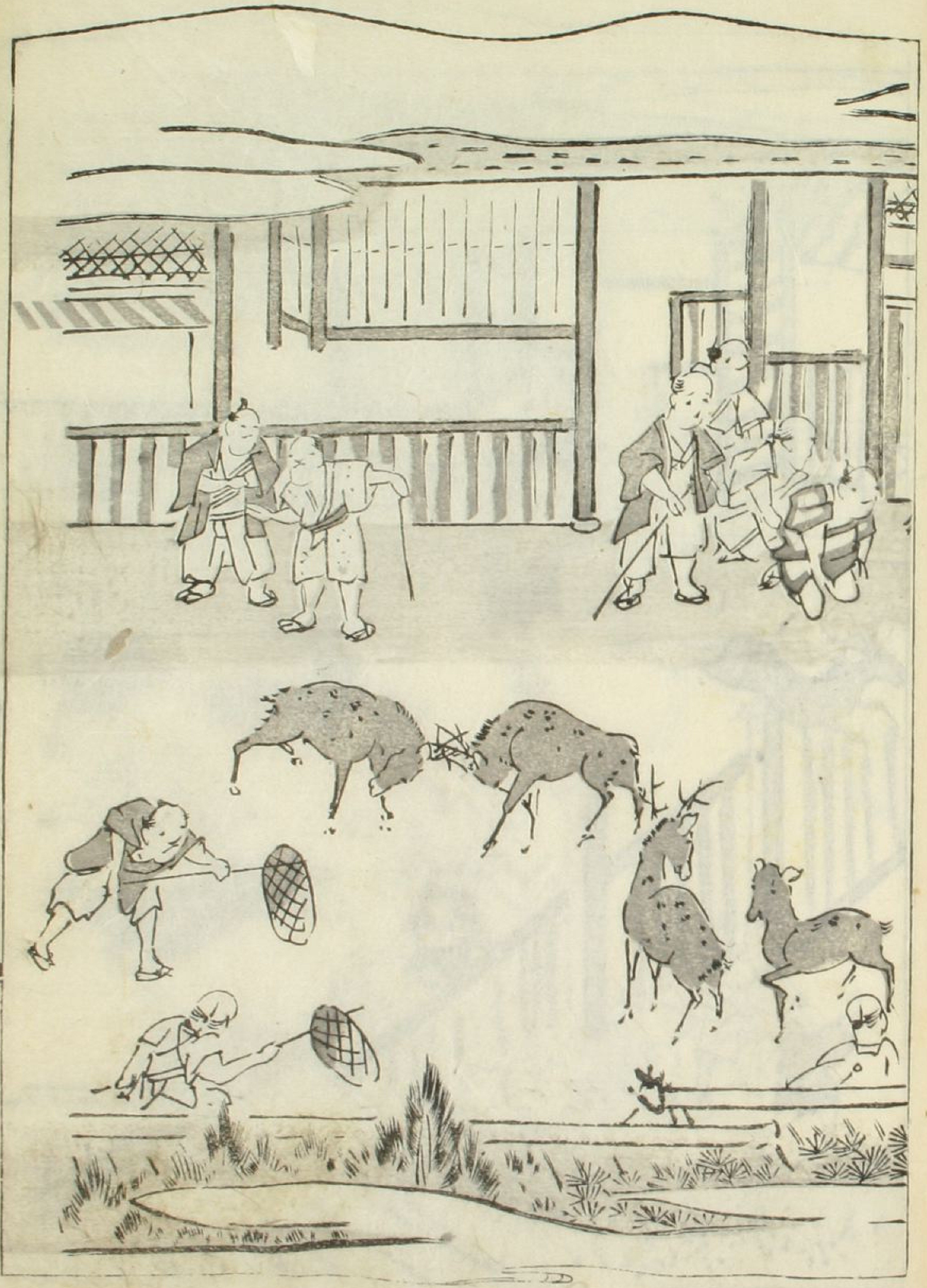
此薮入の袖から落ぬ名残みのし　太笻

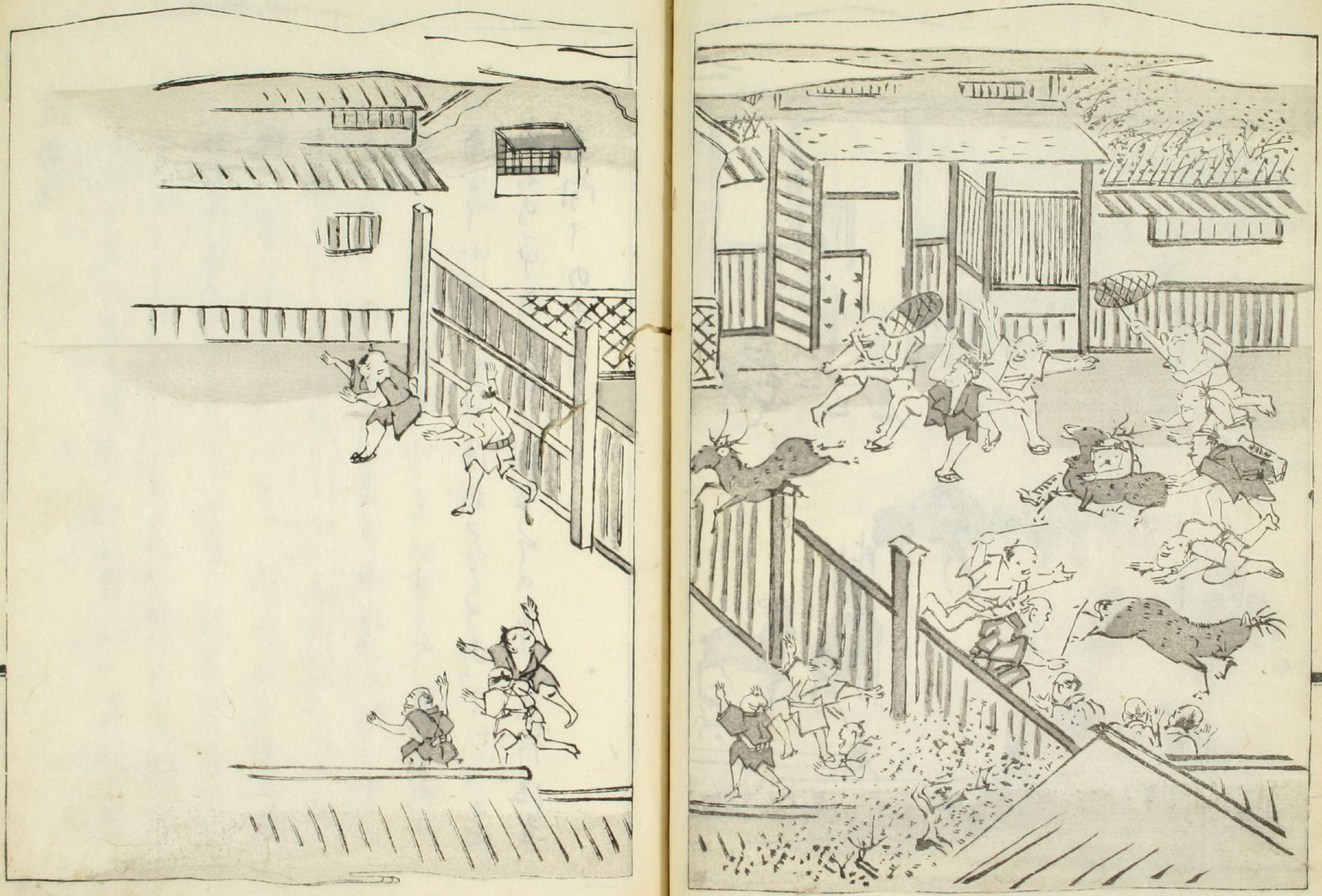
薮入や下手に阿りもや自由もあり　露泉

里又入の聞らぬありける大所で　桃古

やぶ入の若衆に揉て嘯しさよ　正位

藪入の土産に持て紙鉄炮　筌吏





鹿角伐

和州奈良の里に鹿角を切る事あり尤私の態(ワザ)にハあらず御役人并町役人出て切らするゝ猟手(カリテ)ハ町並の役にて何百人となく出て鹿を追集め角伐に熟(なれ)たる者四五人かゝりて或ハ片角伐今片角を伐らんとして取逃すもあり又大鹿を一人にて手ぎハよく伐もあり此者にハ御褒美(ハウビ)給る事ありとぞさて此事あるときハ此里にて若き者など角にて小児を突て怪我(ケガ)さする事ありといへバされバかゝる事なれ又角に用ありての事か未詳(ツマビラカ)ならず春閑てのまゝなるべし

六番

左 てふ

初てふはさそはれて利きて浮月に残る　里女

ゆきし蝶やいふとふ跡に留る戸口かな　梅今

飛蝶の影をさしたる桜かな　素芯

蝶をとらん月夜の下に生まれけり　月亭

蝶〳〵やかゝるところに影の美しき　士朗

死れハ来世蝶に一ツなりて　与人

留主をして蝶の絵を覚えけり　茶静

初てふを忘るゝ隙や花さかり　鳳郎

右　すミれ

余の艸は名の見えしけり菫草　吏牛

手にとらふのを見ちり吹菫かな　楽菜

眺る子に手からうけすミれ哉　梅園女

今おしき無けれし鍬の菫哉　一茶

山の腹ふとき語りすミれ哉　茶静

二つ翁のおそ拝て通る菫かれ　河蓼

淋しさをしらで見て知らぬ也菫　由哲

ちらつかりし菫影も西むき　蒼虬

茯苓突

相州名産なり松明を携て山へ登るに茯苓地中にあるハ必ず炬火(タイマツ)を消す其所へ下に竹或さして置き翌日行て堀なり又錐(キリ)を地中へ突立茯苓ならバ抜けざるを見て其所を堀出すなり

因に曰松茸のある所を識(しる)るに紙燭をして行バきのこのある所きゆるとなり

七妻

化猫忘

連て鳴声みちて喧也猫の恋　蝶六

うかれ時思ふ猫の声もなし　五今

人を寝て仏月和らひ猫の恋　大之

猫のきびしき和ほと身を守る　雁嶺

麦畑ぬけし来る也猫の恋　一具

野らの猫身をもまかせとる恋も猫　桐雨

恋の果終に野猫と成にけり　詠悩

寝て起て大欠して猫の恋　一茶

恋もせで猫の子嘘月夜かな　里女

山里も宵から更て猫の恋　多々女

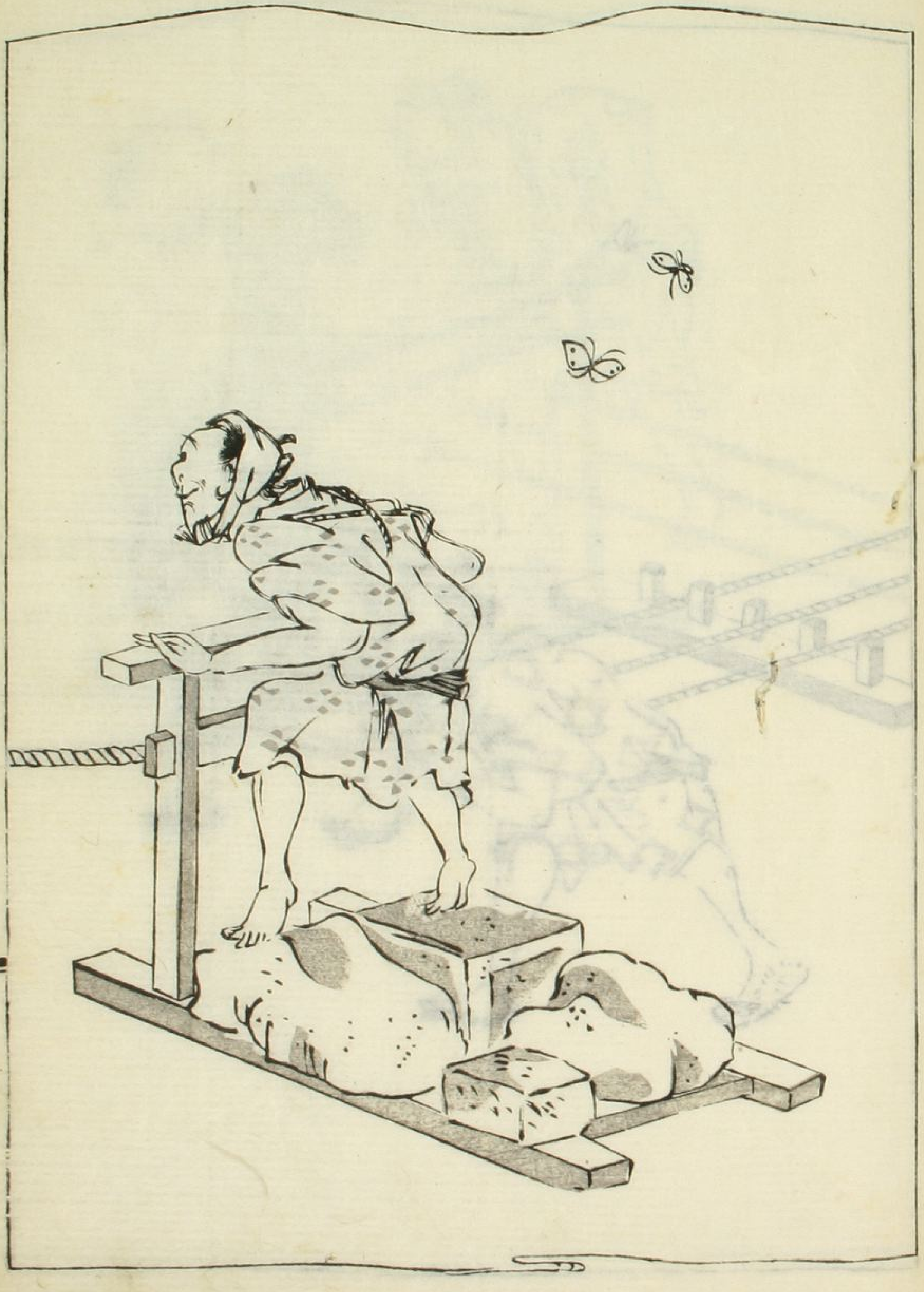
右　雉子

明ぬ夜のもとり聲明雉子の声　完来

雉子鳴るさへ和て美しかりけり　推己

朝ぼらけの出て下る小松原　蒼虬

志からくハ気色立る雉子の旅　碩布



羽叩て草きる雉子に別かな　風外

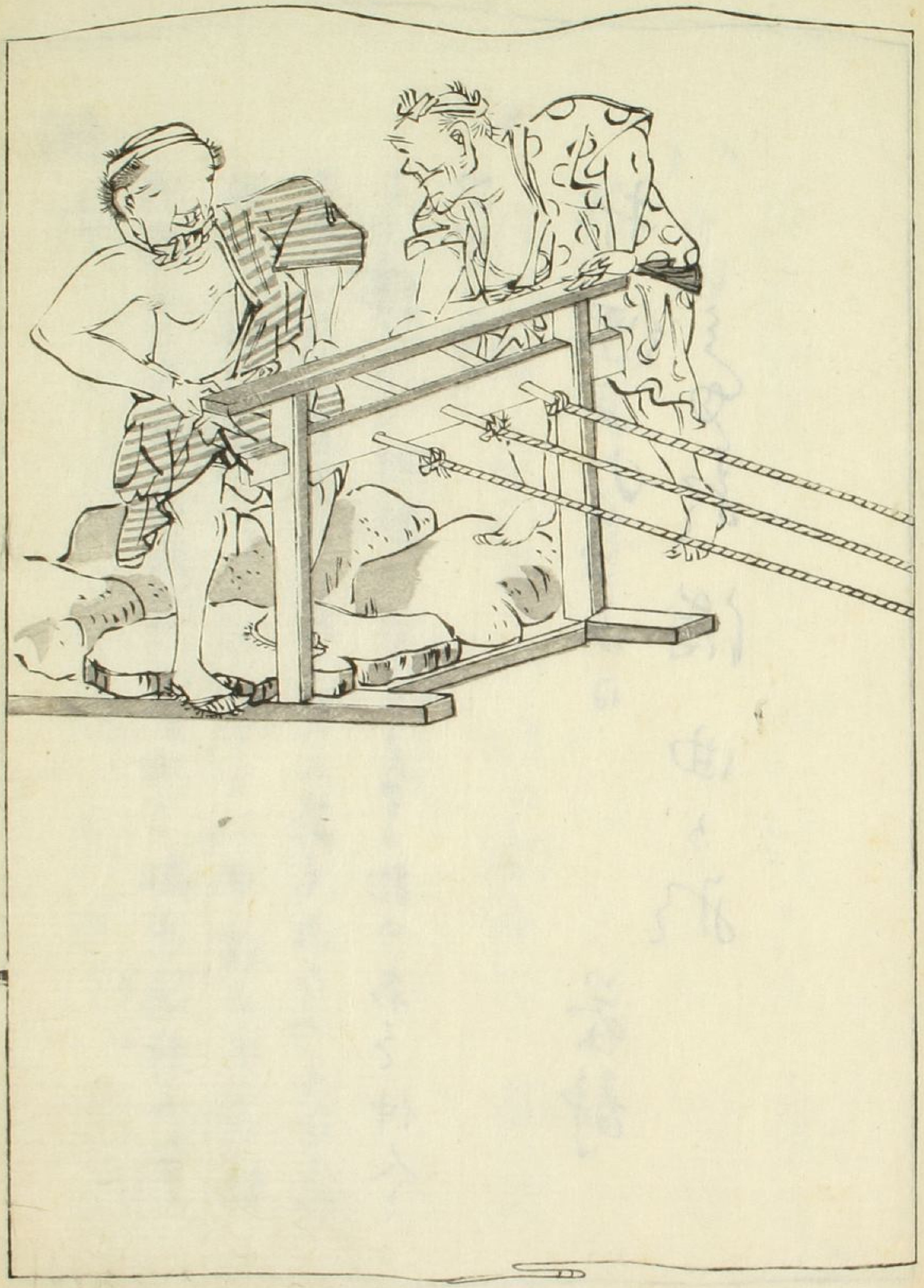
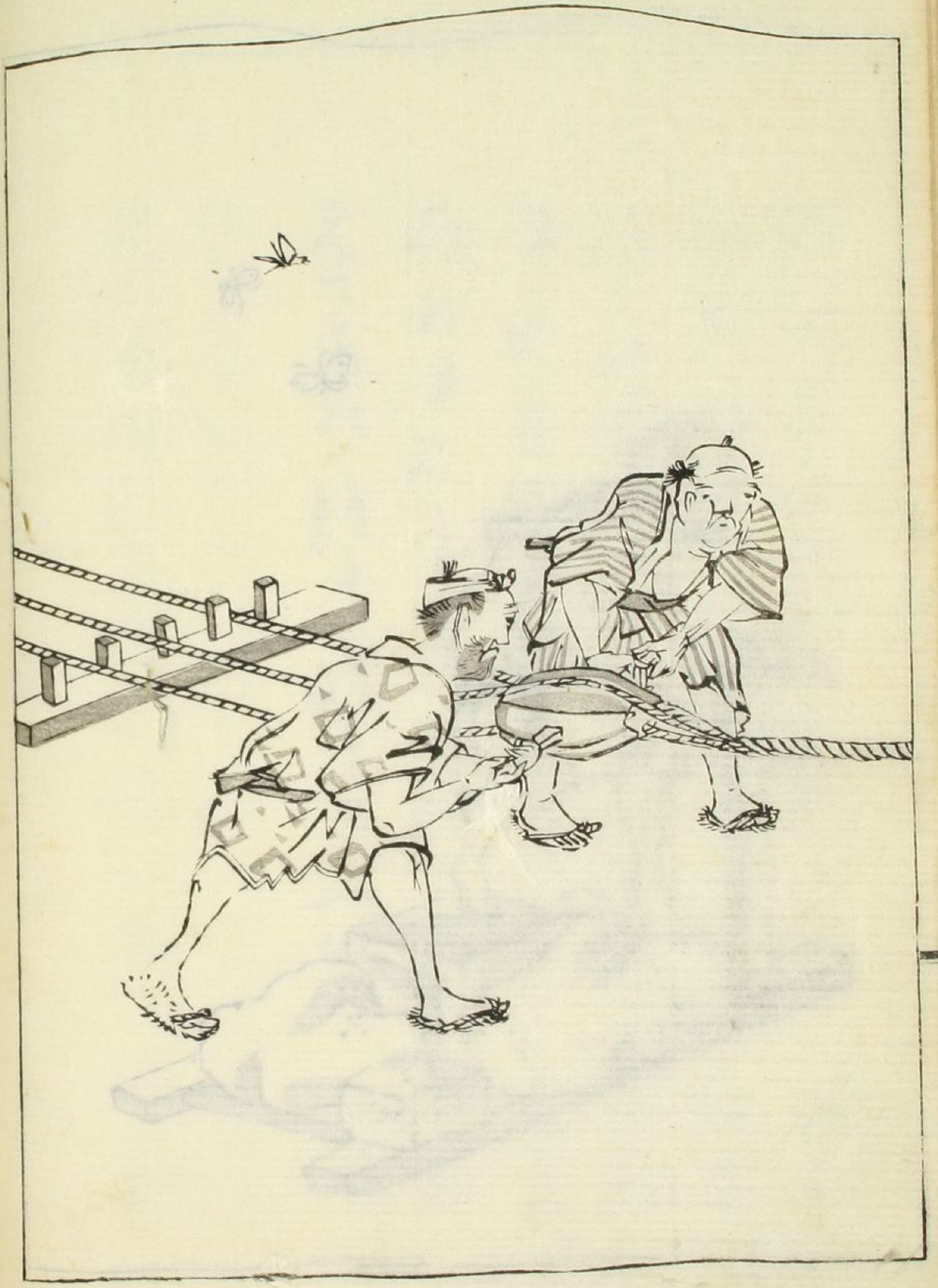
笛鳴て雉子の羽撞て蒿菜のめ　梅今

雉子鳴や池へむかふる吹下風　淞路

雉子の声抱子に袖をかざしけん　多ゞ女

存ねみんとるや雉子の声　茶静

見て居れば雉子に賊象のうつりけん　五明

綱打

何國にても海邊河岸などに於て船具漁師(レウシ)などの用ゆる綱を縄(ナハ)にかけて紡ぐかくるに中程に木にて槌のごとくなる物あり是にて三筋も五すぢもひとつに縷(ヨル)なり此槌(ツチ)のごとくなる物の名を仲人といふなり

打綱のよるはよるゝ浦曲かな　茶静

八番

左 とゝ本

鰹の生気太くも伸は面白し　西月

飾手を雛の前に隠しけり　八朶

挾莚に待甲斐もなき鰹かな　草琚

残鰹の立し値なる小宗家　尚山

身を思ふ舞子州家のしれなき　文洲

学の戸は雛は氣安きお都か　虚白

土雛や立木の桃をそれながら　茶静

右

汐干

人はみな目あてに出る汐干かな　曽兄

並ひ汐に吹るの色も汐干かれ　松什

打寄は何の錦や汐れ哉　鶴阿

火を焚も面白かる汐干かな　葛三

中々に名のない色も汐乾貝　茶静

汐干とて若衆なしに遊ぶ宿　元風

宿々で見るや汐干のもどり汐　雪柴

栄螺取

上総房州辺海中の岩に栄螺出て五十も百も這て遊び居る所へ舟二三艘も間近く行に栄螺も櫓櫂(ロカイ)の音を聞て力一ぱいに蓋(フタ)を引しめ縮(チヂ)り込みつゝに尽く(コトゴトク)岩の上よりころりころりと海中へ落入りて一ツも取事あたはず其岩の辺へ塩薦(シホコモ)をおきて置に翌日(ヨクジツ)ましてさゞえ数百此薦の上に遊び居る所へ舟を漕(コギ)よすれハ栄螺ハかのめく力一ぱい蓋ハすれども己が貝の角薦にかゝりて動(ウゴ)くことならず引行て石を拾(ヒロ)ふがごとくやすやすと取といへり

加賀までも取に行をさゝえなどゝいふ人もと
薩(サツ)まに取ずに行とものとめり
筑前にては銛(モリ)にて突取といへり

苦しとも思はれぬ
くらめる栄螺取

葛三

九番

花桜

いつしかと見ておりけり花の先　田拙

初花や久かるほどに早きにし　葛三

初花や田思ひ道に年のくれ　里之女

大花や古枝おほえの一二輪　美花

はつ花やあかみつゝ一勝さ待　歎子

初花の二もとに咲て居りまゝ　茶静

咲とても嘆かれ嬉しき一つ桜　富梅

例の如くさらに初けら　茶静

いざ座らせよに古ぬりを初櫻　松什

おりて来ておもふしらしなき一つ桜　林青

家まかぬかりも笑ふの初桜　葛三

手向さに出すもたゆぬ初桜　宗橋

生さほど人の底くる桜かな　英泉子

誰よりも盛なる桜の散りかな　漫々

見ながらも散るかと思ひけり　曰人

櫻さく桜見入るは人のあき　龍風孚

花ちるや光りは照もそへりけれ　存更

何ふちの影を見付て夕ちから　沙鴎

月清て遠山さくら咲みにけり　士朗

下々に生れて夜もさくらかな　一茶

昼晴は雲か照りし花ぞかれ　乙二

雲のさそふ後る岩根かな　護物

下照りうゑや桜の吹おろし　太節

日暮んと桜はちりて照りけり　有鱗

一日も花は見取り桜かな　杉奴

色とも花に散のは保さ櫻かれ　鳳朗

花をこそ言ふの暮るゝかなさくらかな　仝

霞かけて散止り山花かな　梅今

散りは花さん庭には花さん花桜　完来

こゝら野で逢ふ人ことに抱きかゝる　秋柞

右　花

咲らぬ木も見ぬ里の中　貞心子

潮に浸る人を撓て明の花　茶静

鉢植をさし遣さや花の鐘に鳴る　成美

座敷に鯛抱出て花見哉　仝

何事と問ふて花見志まひ哉　茶静

花ちれ巷さるまてを人まての旅　雨考

堪忍をしては行や花の山　一茶

山里や耻ぬれしも花のさかり　葛三

庵に掃除して居る花の奥　仙兄

花の散より見にも来にも思ふなり　玄子

花の散あらは他人となりぬれ　一茶

鋪迷ふ木の下陰や花も散　先鳴

花にはく折らしの嘆かれ　よつめ

花に咲ば我若やぎにけり　葛三
ちり事ならぬ振分髪の上　茶静
菜を採るも食は何の果報哉　梨椰
花の山下りて見れば風呂かし　一具
朱樒嬰栗紀行の秋
雨ふらばかはらずよりも我花の宿　道彦
花の香や崖大字何つき壺所　茶静
花に鉦以外る罪は得ぬらん　士朗

よきことに言れぬ物ぞ花の陰　仝
り蓮てさまよふる花見を誘ふ　又々
藤をうすうつゝの出何もぬ花々月　素芯
花の中来る雁ぬ家の中なり　永狐
刻よ中釘打音も花ちる里　梅令
花ゝ散り夜きあるまで空に雲　宇橋
見るうちも不寝りなとも木咲て　由瑩
散花や我を忘して寝れぬき　峯梅

夏之部

霧にまた出ぬ花けふ朝哉　臥鵬

聞鐘[illegible]見[illegible]花ちる[illegible]哉　蓉静

鯰釣

武品相州にあり海川に浮藻多くある所まて木より蛙をとらへ竿の先へ付て浮藻の上を蛙の飛かめくにまかせ鯰飛かゝり喰付ときはやくうしろへ引あけてとるなり餌を刺すなく総の宮に浮山家湧るてなり是を苗て猟ら知りて物かけに隠れ居て取て遊る事なりといへり

十番

左　更衣

郭公の側へ出てある袷られ　古梨

袷らぬゆゑて盃さしみてる狸　河路

まさにおもふ若心もける袷かな　柴人

かへるめくるへらるてなり更衣　签吏

小はかりもてまる合点なり更衣　霧泉

更衣河原の的のかたちり　葛三

新しき魚喰む到る更衣　卓池

老てなほ物をゝ息すゑへ　夕ゝま

灸たく襟ゟおちる老ほり　蕉雨

山ちるや蝉がさかりて古ゆかしき　巣兆

若葉

深てねるに日和のさゝや若葉山　葛三

ある露にて若葉ゟうつる洞かな　浅義

曙ゝ秋ゟ蓮の中申る若葉かな　笛浅

玉河を渡て若葉に這入り程　由哲

春丸の草木の土より新わりかな　玄子

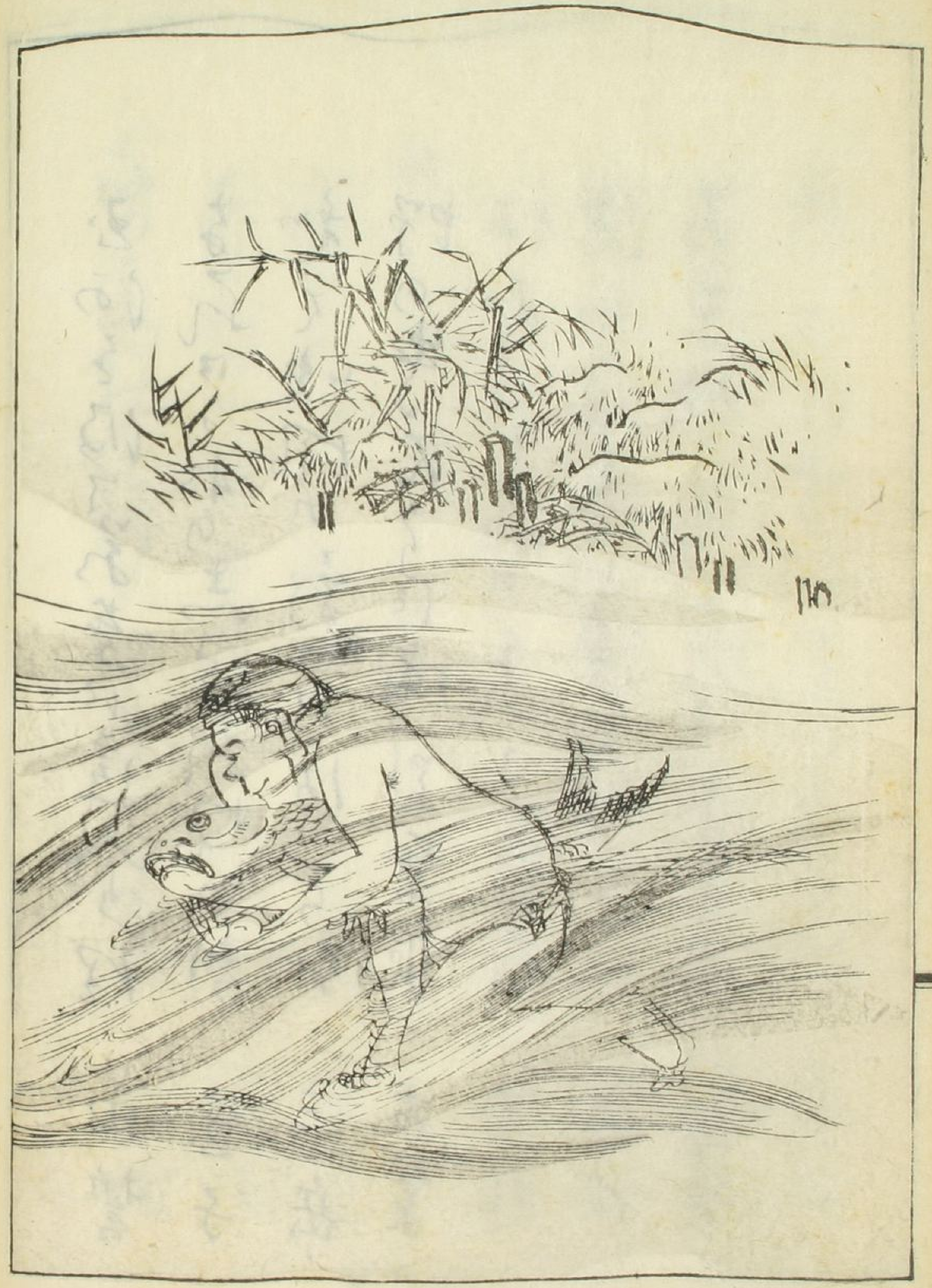
和らく吹風の新らしはしらかな　三岳

蝶の出る方ゟに浅し若葉哉　古楽

何不知の翁か手つる若葉かな　茶静

降りかんでも行日暮かわりたらん　而后

若葉吹うちに見ゆ天気哉　月平



抱鯉

上州武州に有り利根川殊に多し
下野の足利川にても鯉鯎丸石なとにも
魚は抱なり攝州市岡新田より大坂より尼ヶ崎の間
入江のやうなる池多く其池にて鯉多く取るとぞ
其所の人網に頼に鳥目六貫文まて船三艘に十人
も出て網を池中へ張廻し次第に縮め寄鯉を
抱上る江水際まて浮上りたる抛揚る所を篭
て取に居る者さゞえを持構て待うけ中にて攫
とるなり水中鯉を抱にくくなるときは其の手にて
鯉の目を抱へ塞き抛揚るなり水離をの吉
際は大に手練有りと聞り
鯉多く取得し池にも味ひよからぬ由なれど價
低しとなり

十一番

左　時鳥

時鳥待ちの山里垣根かれ　葛三

おとなはて過る時も待れける　抱儀

まつ虫とおもひのほかや杜宇　芳古

待身にはきゝはなれけり杜鵑　雨考

雨立て二の声まつや郭公　有来

人を来て何をいふやら探りけり　鶴司

採りけり我子の出来ける子規　四山子

なつかしき声せし浅て杜鵑　千影

子規人数まてをみゆるかな　子鳳

去川ふれいつきたる聞けり時鳥　抱儀

啼ぬ日は啼ぬ鳴ぬ音や時鳥　露泉

啼ぬ日の啼ても啼ぬ子規　吏牛

鳴ぬ日は鳴ぬ聲にきこえて杜宇　作者不知

右時鳥

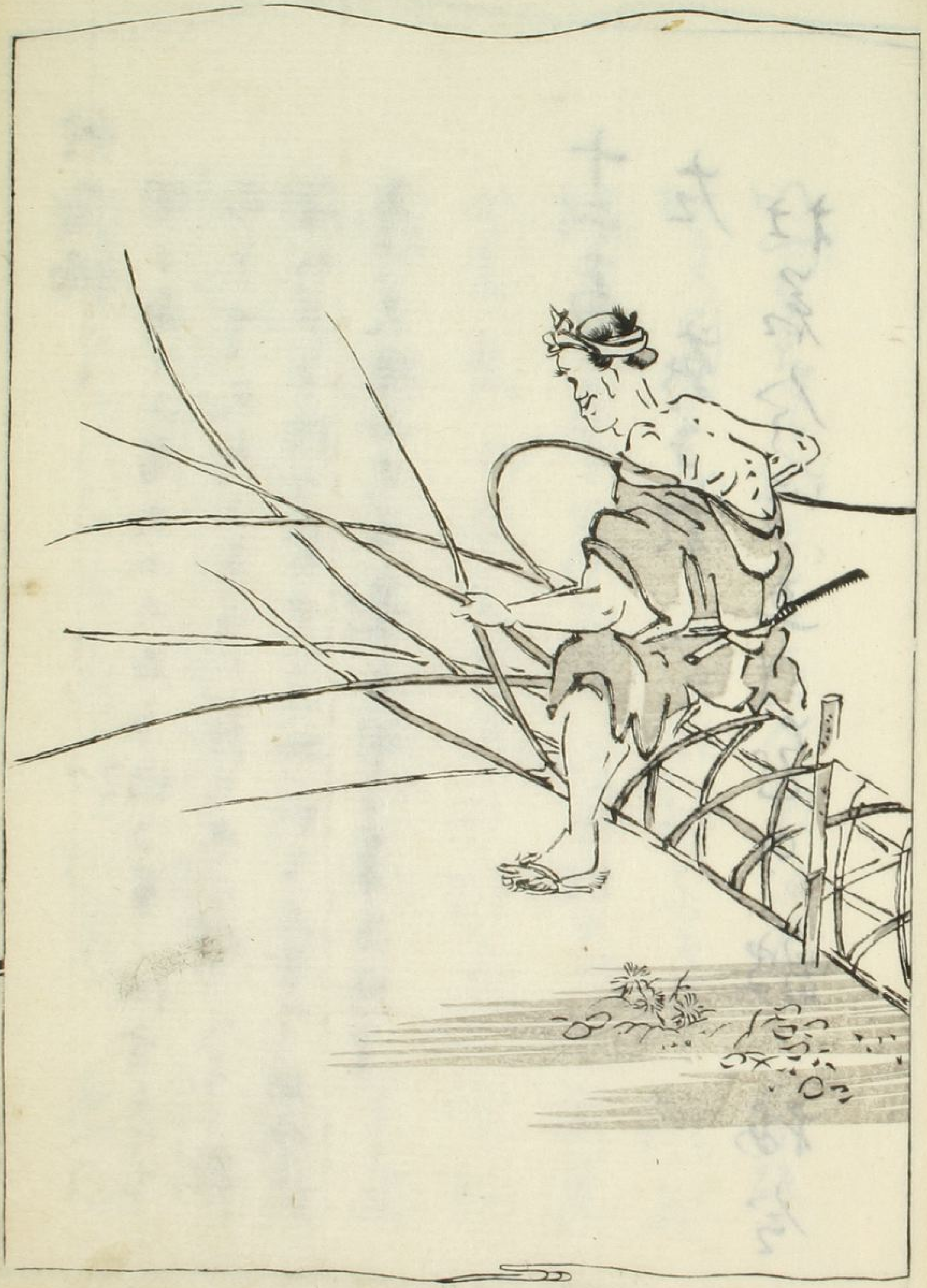
鳴きつゝや夜の虫の音のほとゝぎす　玄蛙

啼けいさり鳴らるゝも子規　鶯汀

拙き聞てからおぬるかな　田人

茶畠や菓もあるやうに木がくれ　梅今
菖蒲中存分咲やほとゝぎす　茶静
山路来て雨はふる也時鳥　風朗
山風に散かゝりてほとゝぎす　卓池
いく人の探見や今の杜宇　一具
ぬれひゆりにて薮の末や時鳥　蒼虬
声なくば遥山路のほとゝぎす　梅間
時鳥東に於遠や若葉あらし　風外

みるみほとゝ霧の露や子規　漫々
大雨に田かへし捨し夜雨哉　月居



蛇籠編

図之所ニ而有大小の石を借る事ハ何方にても
あるまで又所ニ寄てハ籠の中の廻りくよし或ハ
篠竹木を結ひて其中へ小砂利を入れて用ゆるも
あり又塘木の下臺ニ用る事も有之

十二番

左　燕子花

杜若今咲きしの艶　梅　仝

いつまでも初恋ふかき燕子花　素蝶
かきつはた聞くや雪に飛ぶかきね　嵐水
持てくる翠簾屋て咲くや杜若　西月
小さ露の女夫草や杜若　宇弘
盛なるあらしや寂しかきつはた　里女
咲ひらき雨にまかるや燕子花　道彦
ちるはせや火なき楼台の杜若　仝
灯を見せて夜半の中夢にも杜若　素芯

右牡丹

能う見とされこそ思ふ牡丹かな　梅裡

もらひ人のあるら惜む牡丹かな　咻石

牡丹とハ思ひ切るせんかな　都波雄

新子晴るゝみぬるほとゝかな　笛成

了て掬ても福ある牡丹哉　一茶

雉子の辞義に咲てゐる牡丹哉　葛三

河岸に咲てのみゐる牡丹かな　茶静

見ても澄の眼にはさし居る牡丹かな　仝

我て来て晴るをも知らぬ牡丹哉　有鵠

亀突

江戸よりも三十年も以前より佃(ツクダ)嶋の漁夫(レフシ)二人
乗(ノリ)舟にて羽根田(ハネダ)の辺より行徳(ギヤウトク)乃辺を見歩
行見付け次第小鉾(ホコ)にて突取し六日七日素手まて
捕る事なくして常に釣りし此亀ハ一名正覚坊と云
なり其足とれハ價(アタヒ)余程よきをもつて房州
鳴嶋野島山よりあり此亀をハ長五郎と云ふ
る漁家(ギヨカ)にて数年取来るよし他家にてハ不
取と聞り
都(スベ)ての疾(シツ)病を避(サクル)薬のよし又腮(アゴ)を鼈甲(ベツカフ)の細
工に用ゆとなり

十三番

左　松魚

噂る藻も其海そはつ川を　秋峯

今はまた大磯て出るや初鰹　水竹

松魚舟波を大磯まて走りけれ　逸淵

水天ぬれもまり人の初鰹　玄子

妻かへて来り離せぬ初かつを　宗格

上付の松魚走るまゝ根岸で　梅今

今咲てやもしいかり初かな乎　茶静

お通りも肩衣申て左り鯉　酒一

りふみ策て見されハ岳の鰹ハ　洗風

右

短秋

まゝ人のいなぬうちから明易し　露泉

二三昧さくらも起て見る秋の明易し　仝

明あき秋の明ろき待さは星　西里

見るまゝに吹替夜ハ明易し　一具

野末の雲の海となりかけて明易し　茶静

何花木の花およそ白りて明安し　梅今

筆ともあらさ人に出逢て明易し　青壺

次の入江の深さもりや明易し　笛成

城郭先ハ越路ゆかに倦して
上尾やより

証先を思ふ一と秋や明安さし　晨文

鯰挟

上総木更津辺にあり田の渚の鯰炎暑にて
ある夜ハこれ仰向になり腹を出し浮て
あるなり松明を照し竹の挟をたゝみてとる
夜半ほとに一升ほとも取るなり竹挟ハ焼
て真切の形ちなりしたゝむ所釵を刃を付て
用ゆるなり

十四番

左 粽

結ふてぬる粽の茅は捨られし　春佛

喰ふときも手本に見る粽哉　風窩

見てゐれは結ふて手はやき粽かな　茶静

味ふ迄入粽の使ゐ哉　蝶六

住ぬ野辺や住よいて見れ笹粽　由誓

小はし江持参せし粽かな　葉二

海しくし茅のこてぬる粽かな　逸淵

積んで送る出さぬにつゆる粽かな　鳳朗

遅き夜鶴の出屋中にさ又哉　茶静

舟からの池もぬまあるちまき哉　卓池

翁河や夫やちらちら粽かな　松翠

右 蝸

一色て蝋そ絡きみならし雲　茶静

蝋清りて迎えに来らう梅の亡　風外

しや鈎つら秋ハなりけり菊小色　露翁

かゝみを出て～ぬ秋の故に～てぬらかゝ　回人

鶏鳴や碁盤突出しにしやの子　逸淵

昼の蝋留主にさるとて鈎ゑをり　梅今

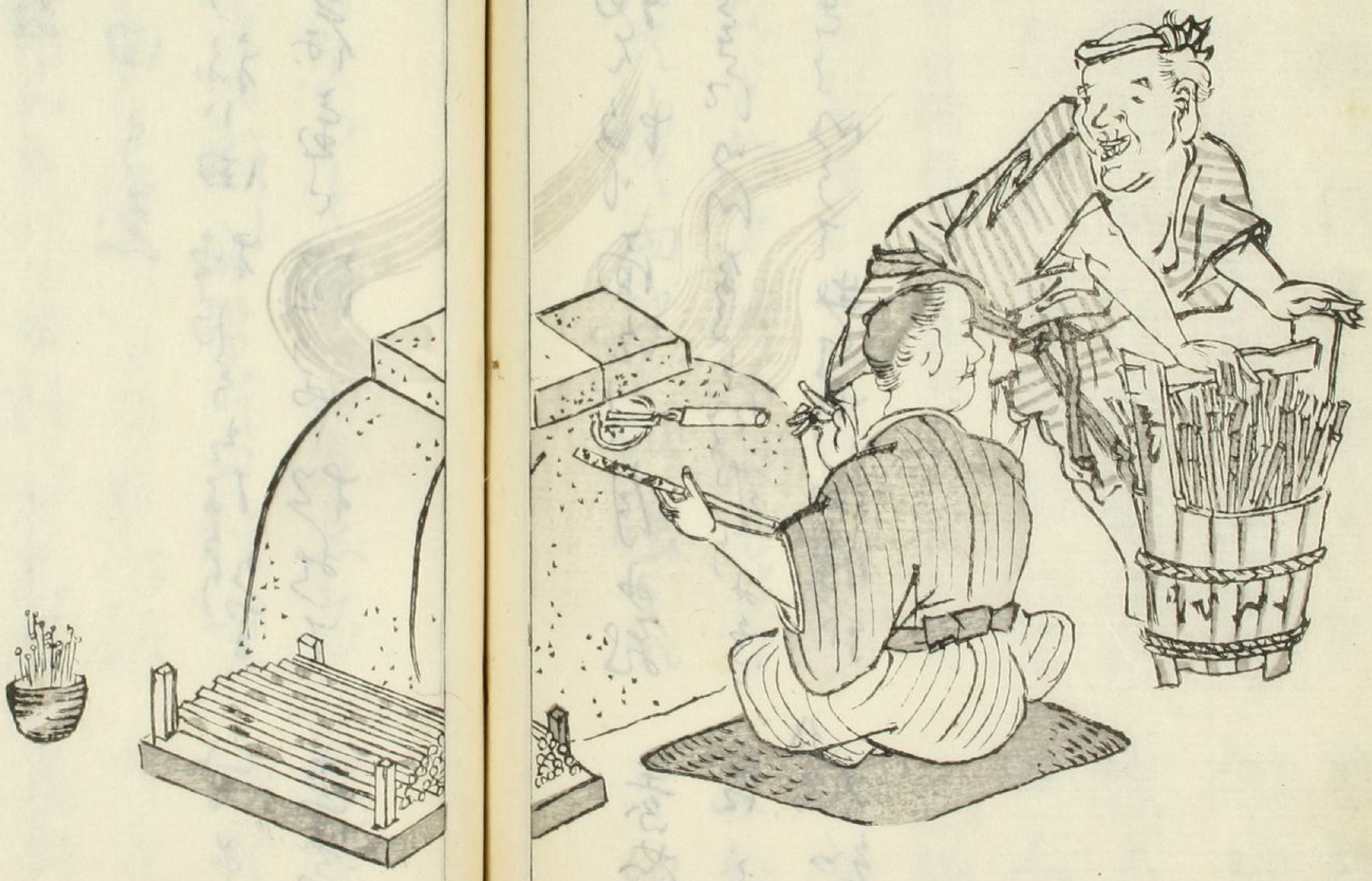
しや取りとの門を静まや網もちり　蒸郭

手操て鈎を雨呼蚊帳のそ　卓池

蝋鈎ん蚊帳面白し月の花　素芯

しや柔をこの川なるとぬ菊りみ色　台之

蝋清まりて出てけり四条郡　作者不知



らう竹作

江戸本所渋草島辺ニあり上総の木更津ニても作る竹の皮めくなる物を以て竹ニ斑をぬりていぶし焼ミたる後洗ひて落すなり

十五番

左　田うゑ

墨ら孫ハ田植らうたなりけり　寸長

苗一荷重き渡りや松の下　杏呂

八束のうちに思ふ田うゑ哉　霧泉

明うけも知らず覚えて田植唄　由哲

茶の木まで浴ていさ海の苗の泥　可九

昔造化の女みな田植ともしき　蘇静

人まねて植て笛ふく門田哉　有鯨

植渡す田に鳴止みし鷺られ　茶静

見てをりて其所田うゑ哉　水谷

右　五月雨

たしるゝは降らぬ雲ぞ五月雨　素撲

五月雨や辛えし物喰ふ男かな　以とめ

忘れ居へ知識まゐるや五月雨　茶静

子福者は餌ねだりぬ五月雨　元風

五月雨や咲そこねたる知らぬ花　馬年

さみだれに拾ふ人もなき白き雨　浅美

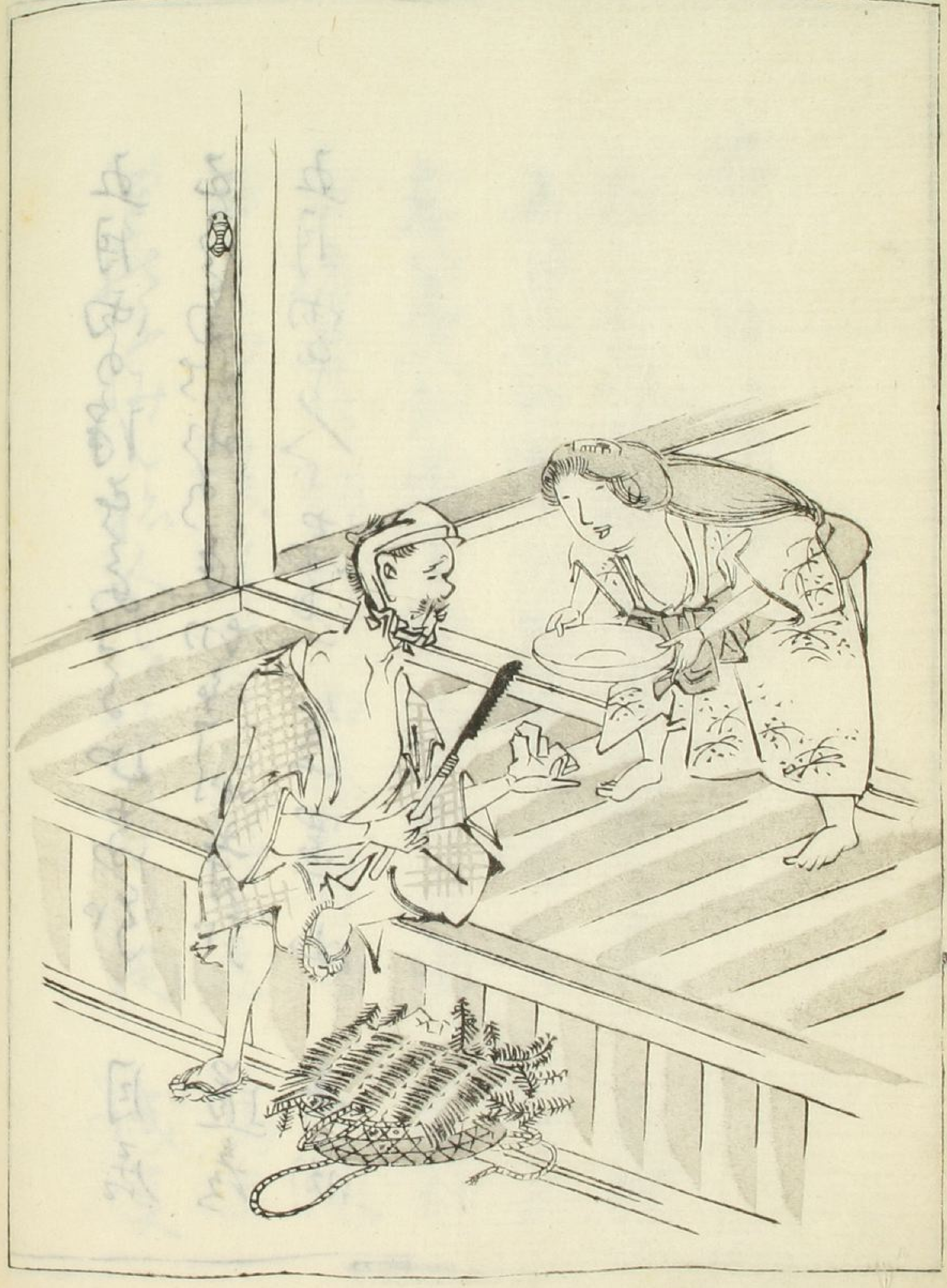
五月雨の降こめたる山家かな　月居

五月雨は水の手切し小寺かな　道彦

五月雨や人は家もつ笠置山　斎湖

氷賣

出羽越後等にあり深山幽谷へ敵に行里へ持出
先ッ所の地頭又代官之へ呈て後賣人ハ別に
何人もありて篭に入笹葉をのせて城下又
は繁昌の地へ出駈ありてうるに買人あれハ
鋸にて挽割て好む所に依て六月一日より
七月まても商ふ此氷山に寄て種々あり
山の名を呼て賣歩行となり



ちみ集撰まれしおきなら
くら蝶夢の請ありける時吟て

山の名を呼ぶや
はし声や氷売　梅舎

十六番

左　蝸牛

糸遊もきゆる葉末や蝸牛　茶静

庵まで一日居るや蝸牛　風外

古寺や太鼓の音して蝸牛　梅舎

何を取りつ世界を責る蝸牛　茶静

おもに取る舌先にありて蝸牛　鳳朗

夕月や大肌ぬいでかたつぶり　一茶

右　若竹

通さぬや竹植時のあかり　萬光

竹植てたのまて膝ふあくらん　由楚

今朝植し竹の聴わり風のをと　象豊

篁に植て生れし雫かな　露白

竹の外究竟の栖かな　泰静

早かれ竹と成りぬ二日おもち留主の中　春路

山椒魚取
相州箱根山谷に上品あり 杉の葉にて飛上るを
纔(サデ)網にて取小児疳の薬なり

十七番
左 ほまる
探ゝ見やはり秋の堂　逸閑
地に落て拾ふに見る螢かな　悠之

手にとるも螢同事に逃行空　深芳
露に燃ていさゝかは轉ふ螢かな　志め
逃るとて大きう成し光るかな　龍昇
我物になるとはおもはれぬ螢かな　叢鶴
螢狩隠れし所も知らぬ草の原　仙児
一ちらり漏てちらさぬ光るかな　六蝶
杭際に濁る巻き螢かな　蒼帆
沖へ出て吹回されて光るかな　桐堂

涼しさや堂の迷ひ子あかり内　可慶

ふら家や堂と絵の新茶哉　茶静

横町の植木屋へ行螢かな　素芯

杉の葉に止り付たる螢かな　梅令

日暮れて宿さ螢にまとはなり　浅翁

来るやあちこちの夜の織をく　蔦三

取るも見へぬて走るほたるかな　貞窓

暮や螢み眺るぬ仔ありて　白扇

右志よみ

淋淨やあれ流れ水は清水　道意

静さや清水みな之葉れ蔓　柳也

稲にいつ素人はなく清水かな　士馬

杖笠も旅手出て来る清水かな　山外

懐へおとしたつしし清水かな　風子

一とはこの事て清水の濁りかな　素竹

糸瓢のさすまて汲れ清水哉　遠之

我影を濁て立去る志水川　宇橋

旅僧の自剃してみる清水哉　江三

ありあけの清水に蔚気鴫のおか　貞風

母馬の嘶て飲れ志水かな　一茶

人去て笹葉に流るしみ川の音　玄子

小桶にて茶盃付るしみつかな　八朶

法秘庭の清水に蝶の騒かな　茶静

杉手の庭まてとゝくしみつかな　福栄

寐ころまて浴衣あくるしみつかな　旧人

山雀の汲て仕舞し志水かな　梅令

昔ゝ秋ハ眼るみのさえ清水かな　守里

蛇取

関東(クワントウ)國々にありて手に鎌(カマ)を持腰に魚籠(ビク)を提て来り蛇を割(サキ)て皮を捨(ステ)肉(ニク)ばかり取て籠に入る

小児の氣力を益し又蟲(ムシ)を去る薬也

十八番

左　暑

世事にかゝり秋まで文をも紀暑かな

青鴻

暑き日や代て流るゝ河の舟　宇橋

みんみんは浜の津ぬ暑さの中　蕉鳥

溜池にちり笠つる暑さかな　茶静

蝙蝠も暑さに翦るにみちた　素芯

此暑さ虫の色まで無かりけり　風外

炊きた湯の煮さるも暑さ哉　太笛

積まつて暑の暑し海の端　乙二

信濃路の山が荷になる暑哉　一茶

暑き日の梅を登る鼠の聲　倢當

暑き日や出て行て其出行る　一具

居ところも紛になるる暑さ哉　露泉

人来て妓まても居らぬ暑さ哉　風外

暑きにて梢へあまさるる清生が　一瓢

はつ秋に梢も駒し暑さかな　蘋心

かはかりも暑き吹るる夜半哉　鳳朗

右　涼

生死ら生れし味知る術涼が　露光

居所を替りて猶涼しさは　李幙

きはしきや今まで見ざる蜂の巣　由誓

遠里の鐘を手枕にて夏涼　里人

涼風の笹を吹ては来てさきり哉　青壺

涼風の吹ぬる夜の月もなき　士朗

涼しさにめでて不自由も馴れにけり　茶静

身のうへの鐘とも知て夕すゞみ　一茶

ひとしきり忘れて吹ける橋の上　万嶽

お俵で来ながら吹て涼哉　柴人

麻衣の裾をまくりて門涼み　静風

門涼母の噂に入りけり　元風

門涼み嵐吹りに這入る程　芹舎

柳から吹く静かなるや涼哉　蟻兄

出ましたち売や雀ハ蛤となる　同人

きくさ枝をもてみて終ずの泊り錠ん　意子